論文の和文要旨

＜博士論文題目＞

米軍立川基地拡張反対運動の再検討
—「流血の砂川」から多面体の歴史像へ—

＜氏名＞

高原太一（たかはらたいち）

＜概要＞

本研究は、1955年5月に浮上した米軍立川基地の滑走路延長にともなう拡張計画に反対した運動を再検討するものである。同運動は、これまで「砂川闘争」と呼ばれ、その過程で生じた3度にわたる警官隊との「衝突」が、歴史像やナラティブの中心を占めてきた（その最大のものが1956年10月の負傷者1000人以上を出した「流血の砂川」と呼ばれる出来事である）。本研究の目的は、同運動を規定するそのような歴史の見方／定説を相対化し、多面体の歴史像へと切り開くところにある。

そこで、本研究で着目するのが、「砂川闘争」として語られるさいには照明が当てられてこなかった諸主体の経験である。すなわち、「衝突」に着目する限りでは、周縁的な位置に留め置かれる主体たちの経験である。そのために本研究が検討素材とするのが、「記録」である。地元中学生の文集、地元農家の女性たちの綴方、地元リーダーの国会委員会での参考人陳述、運動支援に携わった知識人によるルポルタージュ、地元農家と交流を重ねながら作品制作にあたった芸術家による写真などが、本研究を基礎づける史料である。その分析のさいに焦点を置くのが、諸主体が運動のなかで経験した主体位置が転換する瞬間である。各主体は、その位置どりゆえに固有の課題を抱えながら、運動に「参加」した。しかしながら、その課題との葛藤を通じて、新たな主体位置へと転換する瞬間が生まれ、その瞬間に訪れる痛覚や喜び、発見を文集などで書き記したのである。それが、本研究の考察対象とする「記録」の内容である。

このように本研究では、「記録」を史料として用いることで、一方では、運動を構成しながらも、これまでの歴史記述や先行研究においては忘却ないしは周縁化されてきた主体の存在が、その内面の動きまで解明することが可能となったが、他方で、それがいかなる文脈や構造の下で生まれた出来事であるのかという把握は「記録」からだけでは十分に成し得ない。その視座の限界を押し広げるために、本研究ではその経験／出来事が、いつ・どこで・どのような条件と過程から生じたのかという状況に注目した。それが、本研究で「状況内在的推論」と呼ぶ方法である。そして、本研究の問いは、次の3つに整理出来るだろう。第一に、「米軍立川基地拡張反対運動」とはいかなる諸実践から構成されていたのか。第二に、その諸実践はいかなる課題と向き合うことで生成され

たのか。第三に、その諸実践はなにを目的とし、なにを守るためにおこなわれたのか。これらの問いに答えていくのが、5つの章から構成された本論である。次に、各章の構成と内容について、手短に論述する。

序章では、本研究の対象、目的、視座、検討素材、方法、先行研究との関係性について述べた。

第一章　正当・正統性：地元農家と「絶対反対」の論理では、基地拡張問題の当事者である「地元農家」の「絶対反対」の論理を考察した。検討素材としたのは、「砂川町基地拡張反対同盟」の「行動隊長」である青木市五郎が、「地元農家」の代表として国会委員会に2度出席・陳情したさいの発言記録である。その検討から、「絶対反対」の基盤に、戦時下から敗戦後／米軍占領下において「地元農家」が共通して経験した基地に関わる3つの出来事の存在が浮き彫りとなり、「不服従」の心性を形成していたことが明らかとなった。同章では、その諸経験について地元農家の「女性」たちの綴方や青木の裁判での証人発言、そこで提出された「土地賃貸借契約書」の文面等から、再構成をおこなった。また、青木陳述の比較から、「絶対反対」の論理が、運動の展開と共に「発展」していくことも跡づけられた。具体的には、継承という新しい論理が生成されていたが、そこから「地元農家」の固有の歴史意識についても垣間見ることが出来る。このように、基地拡張問題の当事者である「地元農家」は、「絶対反対」を訴えることの正当性と正統性を提出するという課題と向き合った。しかし、その実践のなかで、自分たちの歴史への自覚が芽生え、文集や発言のなかで表現された。

第二章　介入：「基地問題文化人懇談会」高橋磌一の「砂川問題」では、反対運動を支援した知識人グループ「基地問題文化人懇談会」の中心的存在であった歴史家／歴史教育家の高橋磌一の「砂川問題」との関わりについて考察した。検討素材としたのは、高橋が警官隊との「衝突」を取材したルポルタージュや「砂川問題」を主題とした評論、講演での記録である。高橋は、はじめは『世界』の特派員として「強制測量」をルポするために、砂川を訪れた。しかし、そこで歴史家／歴史教育家として、「砂川の問題」にどう応答するのかという課題に直面した高橋は、以後、清水幾太郎らと共に「基地問題文化人懇談会」を結成し、支援活動に奔走した。高橋のルポで特徴的なのが、「たじろぐ」という経験である。知識人として、「砂川問題」をどう把握し、そして、反対運動に介入するのか。高橋は、「現代史」という方法を提起したが、「原水爆禁止世界大会」に出席するため来日したインド代表から、砂川への訪問はその運動を尊重するがゆえに禁欲するという姿勢を見せられ、高橋はふたたびたじろぐ。同章では、高橋の他、清水や堀田善衛といった戦後日本を代表する知識人の「砂川問題」への認識や同運動への介入をめぐる思索を比較検討することで、「砂川闘争」という出来事の戦後思想史における位置と、知識人に与えた影響を考察した。

第三章　包摂：「基地の教師」の砂川闘争―文集「スナガワ」・サークル運動・教研集会では、基地拡張問題の地元・砂川町で唯一の中学校であり、拡張予定地と隣接した砂川中学校の教師たちが取り組んだ「基地と教育」をめぐる実践を検討した。主要な素材としたのが、砂川中教師が結成した「基地と教育」研究サークルの実践記録や同メンバーが出席・報告をおこなった「教育研究集会」での報告集である。砂川中サークル教師は、綴方実践を通じて、教室において絶対反対派と条件派の家の子ども同士が対立・反目していることを知り、また警察官の家の子どもが傷を抱えていることを発見した。しかし、北多摩・東京代表として報告をおこなった「全国教研集会」の場で、その実践や文集「スナガワ」は「実感」の次元に留まり、「理論」に達していないとの批判を受けた。それは、教研活動という戦後の教育・思想運動の方向性をめぐって、マルクス主義知識人と非-マルクス主義的知識人のあいだで論争が繰り広げられていた理論と実感をめぐる緊張に、砂

川中教師たちも包摂されたことを意味した。けれども、その課題は、基地拡張反対運動が全国的な規模へと「発展」していくなかで経験する包摂の問題を先取りしたものであった。

第四章　参加:地元中学生／傍らで観る者たちの「砂川闘争」史では、砂川中の生徒たちが取り結んだ反対運動との諸関係について考察した。主要検討素材は、「強制測量」が実施された1955年夏から1956年秋にかけて発行された文集「スナガワ」(第一集・第二集・第三号)の記述である。中学生たちは、同校が滑走路から200メートルに位置していたため、「拡張問題」が持ち上がる以前から爆音の被害を受けていた。文集には、その被害を増大させる基地拡張についての批判的な記述が並んだが、その問題意識は反対運動の展開と共に変容した。同章では、反対運動を4つの段階に区分けし、中学生たちの問題意識や心的態度、行動、また、願うや祈るといった内的行為が生成された状況を考察した。同章では、運動に参加するということの意味を問い直すと共に、その課題への取り組みを通じて生れる飛躍の諸相を明らかにした。

第五章　表象:写真家たちの「砂川闘争」—新海覚雄と向井潔の「作品」考察を中心に—では、反対運動の現場を撮影した写真家たちの諸作品を考察した。素材として取り扱ったのは、星紀市(編)『写真集　砂川闘争の記録』に収載された作品群である。同章では、とりわけ地元農家と交流を深めた2人の芸術家:新海覚雄と向井潔の作品の特質に着目した。「砂川闘争」を撮った作品の多くが、「衝突」の激しさや警官隊の暴力性を捉えたものである。しかし、新海や向井は、座り込みをおこなう「女性」たちの「待機の時間」に浮かび上がる表情にピントを合わせた。その独特の視点を形成したのが、馬場家の人びとをはじめとする地元民との交流であり、新海は写真の手解きもおこなった。写真家という運動現場の内部と外部、当事者と支援者のあいだを行き来することが可能な媒介者としての存在は、しかし、それが一線を踏み越えたときに立ち行かなくなる繊細なポジションであった。向井は衝突現場で逮捕され、決定的瞬間に立ち会うことが出来なかった。同章では、表象という課題と格闘した2人の写真家の足跡から、「歴史」と「記録」という本質的に矛盾する行為の本質にも射程を広げて考察を加えた。

終章では、本研究の総括と先行研究に対する貢献、展望について記した。

以上の考察から導き出された本研究の成果は、米軍立川基地拡張反対運動を構成した諸主体の「記録」を再検討するという作業を通じて、「砂川闘争」と呼ばれた社会運動の集合的な経験を再構成し、その運動が持つ潜勢力を発掘したことにある。それは、「記録」の集合体ではなく、歴史研究のみが可能とする次元:多面体の歴史像の提示でもある。